

2024年9月20日

2023年度後期 第1、2学年学修成果アンケートの結果と考察

はじめに

本学では2021年度から全ての学部学科専攻においてディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーのいわゆる三ポリシーの見直し作業を行い、アセスメント・プランを整備した。その流れの中で、学生のディプロマ・ポリシーに対する到達度を測定し、適切な形成的評価を加えることによって、学生の学修成果を担保する取り組みが必要とされている。これは同時に、学生の学修成果をもとに各ポリシーや具体的なカリキュラム、さらには各授業科目の改善を進めることとなる。

このような状況の下、本学では2022年度前期に、新ポリシーにもとづく学修成果を把握するためのルーブリックの整備を行った。今学期末も「学修成果アンケート」を実施した。本アンケートは、学生が所属学科のディプロマ・ポリシーの各項目についてカリキュラムルーブリックを用いて、自らの到達度を自己評価するものであり、学生の主観的な評価のみが反映されている。そのため、評価のエビデンスとなるパフォーマンスや評価水準について学生と教員に大きな差が見受けられる。これらの差は、学科単位、あるいは全学的なカリキュラムルーブリックの調整に必要な情報であり、カリキュラムルーブリックによる学修成果の可視化の第一段階として多くの示唆を教員陣に提供するものである。

1 アンケート概要

1年次在籍者数732名に対して306件であり、回答率は41.80%となっている。2年次在籍者数751名に対して287件であり、回答率は38.22%となっている。学科ごとの回答数、回答率は以下の表に示すとおりである。

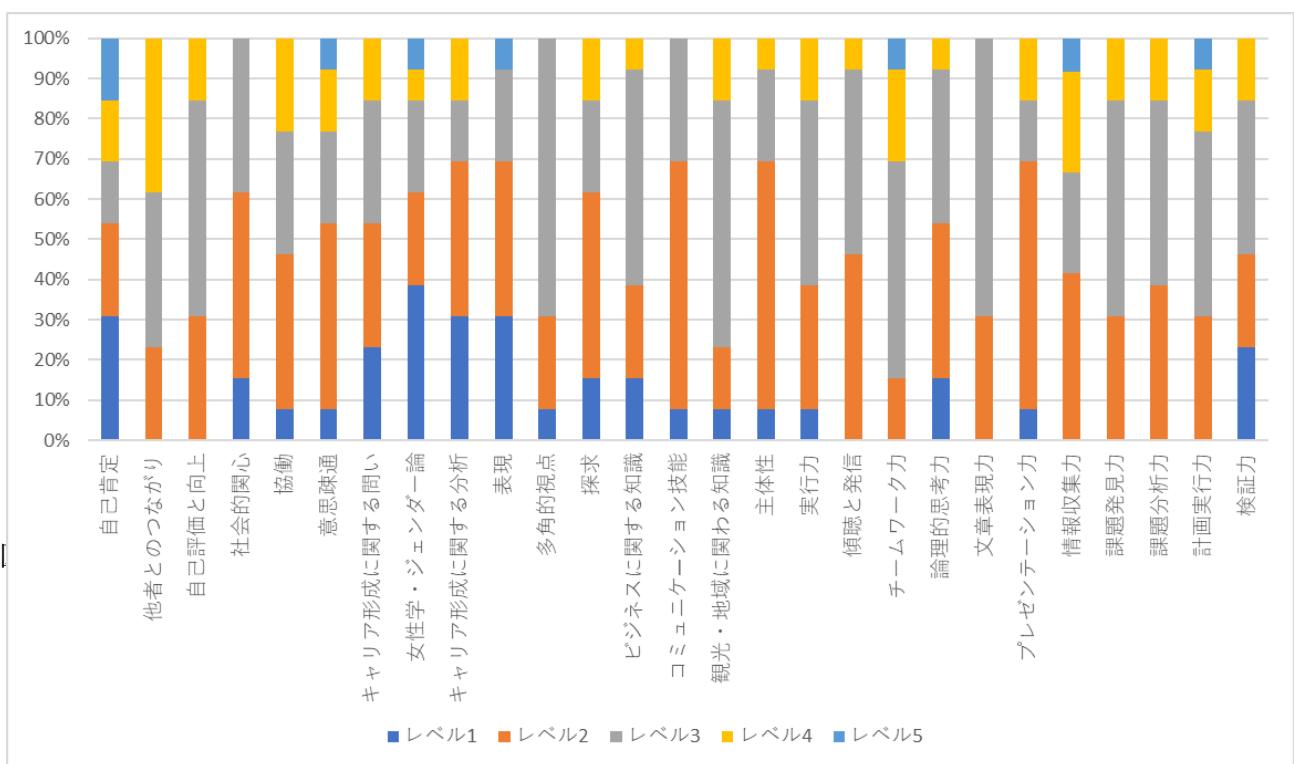
学部	学科	1年			2年		
		在籍者数	回答数	回答率	在籍者数	回答数	回答率
現代ビジネス学部	現代ビジネス学科	105	15	14.29	102	13	12.75
教育学部	教育学科 幼児教育専攻	80	53	66.25	101	44	43.56
	教育学科 児童教育専攻	42	12	28.57	60	30	50.00
	教育学科 健康教育専攻	49	30	61.22	43	17	39.53
生活科学部	食品栄養学科	107	14	13.08	108	12	11.11
	生活文化デザイン学科	70	40	57.14	53	30	56.60
学芸学部	日本文学科	108	39	36.11	89	38	42.70
	英文学科	41	22	53.66	54	21	38.89
	人間文化学科	34	16	47.06	50	14	28.00
	心理行動科学科	81	65	80.25	79	68	86.08
	音楽科	15	0	0.00	12	0	0.00

学科固有 DP について

現代ビジネス学科

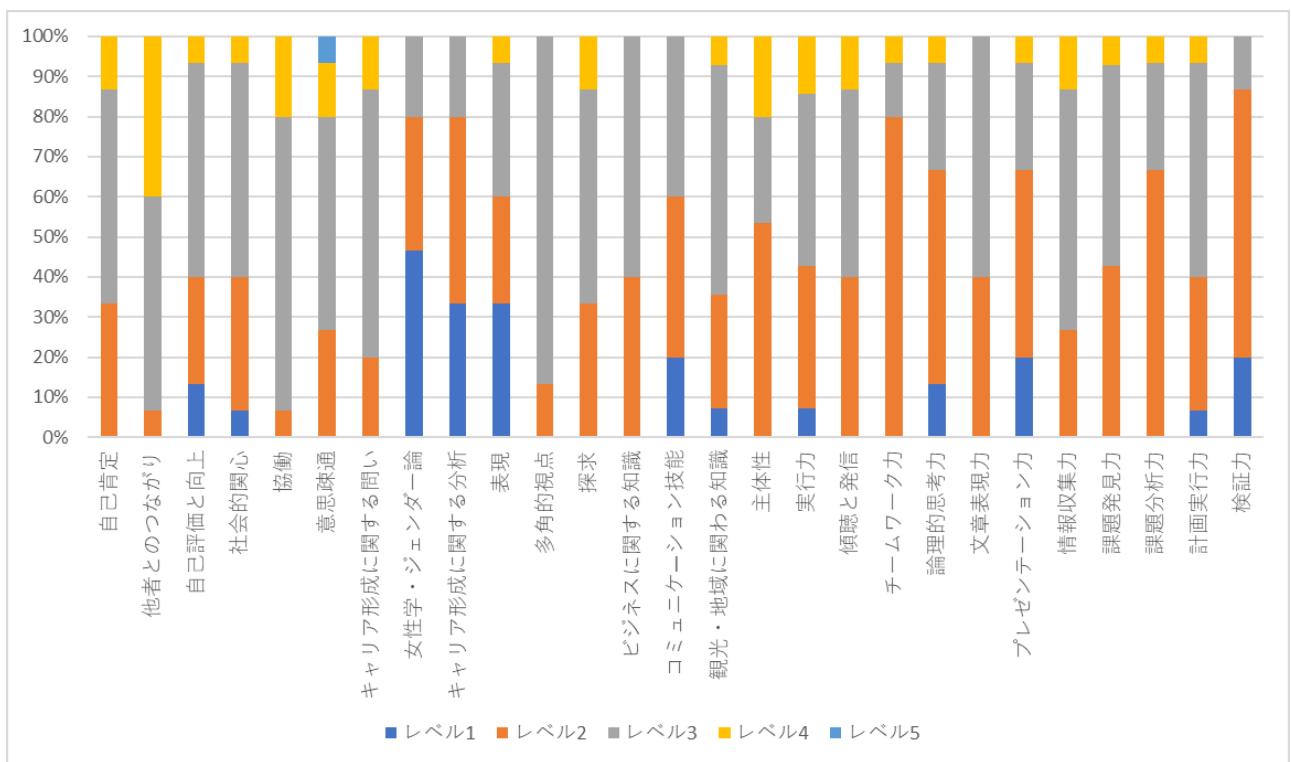
1年生の回答者数は15名（回答率14.29%）であった。図1に1年生の自己評価ポイントの割合を示す。

この結果から、「他者とのつながり」、「多角的視点」、「チームワーク力」、「課題発見力」が平均的に高いスコアが出ており、社会性・協働性・基礎スキルは順調に成長していると考えることができよう。一方で、「女性学・ジェンダー」、「キャリア形成の分析力」、「表現」、「コミュニケーション技能」、「主体性」、「プレゼンテーション力」、についてはレベル1、レベル2にとどまっている。全体の傾向としては、多くの項目でレベル3が中心で、全体としてバランス良い能力が備わっていると考えられるが、基礎的スキルをふまえて応用・分析・批判的思考の領域を伸ばしていく必要があると言える。そのために、ゼミナールを通じたプロジェクト型学習（PBL）の強化、探究・分析を求める課題の導入、キャリア学習との連携を早期に開始などをカリキュラムに組み込むことが効果的であろう。



2年生の回答者数は13名（回答率12.75%）であった。図2に2年生の自己評価ポイントの割合を示す。

この結果から、「他者とのつながり」、「自己評価と向上」、「多角的視点」、「情報収集力」はレベル3が多く、協働・意思疎通もレベル2、レベル3が大半となっていることから、1年生と同様、社会性・協働性は順調に成長していると考えることができる。一方で、キャリア形成領域（問い合わせ・分析・ジェンダー論）はレベル1～2の割合が高く、改善が必要である。また、論理的思考力・表現力にもレベル1が多く、基礎的スキルが弱めである。全体にわたってレベル4、レベル5の割合が小さく、“中間層が厚く、高得点も低得点も少ない”状態が特徴的であり、学びの深化・高次化が課題であろう。そのために、演習・発信・実践の比重を増やす、振り返りとフィードバックを強化する、キャリア分析・社会課題分析の機会を増やすなどの工夫が必要となる。



教育学科 幼児教育専攻

幼児教育専攻の2023年度1年生の回答者数は53名、回答率は66.3%であった。2023年度1年生の自己評価を図1に示した。「協働」を除くすべての項目において、レベル3以下の学生が60%を超えていた。とりわけ「教育学に関する技能」「保育学に関する技能」「計画を立て実行する能力」「子どもをめぐる地域環境への介入」においては、レベル2以下の学生が60%を超えていたこと、「総合的な能力に基づき保育を実践する能力」においては、レベル1の学生が60%を超えていたことから、これらの項目については特に自己評価が低かったことが伺える。

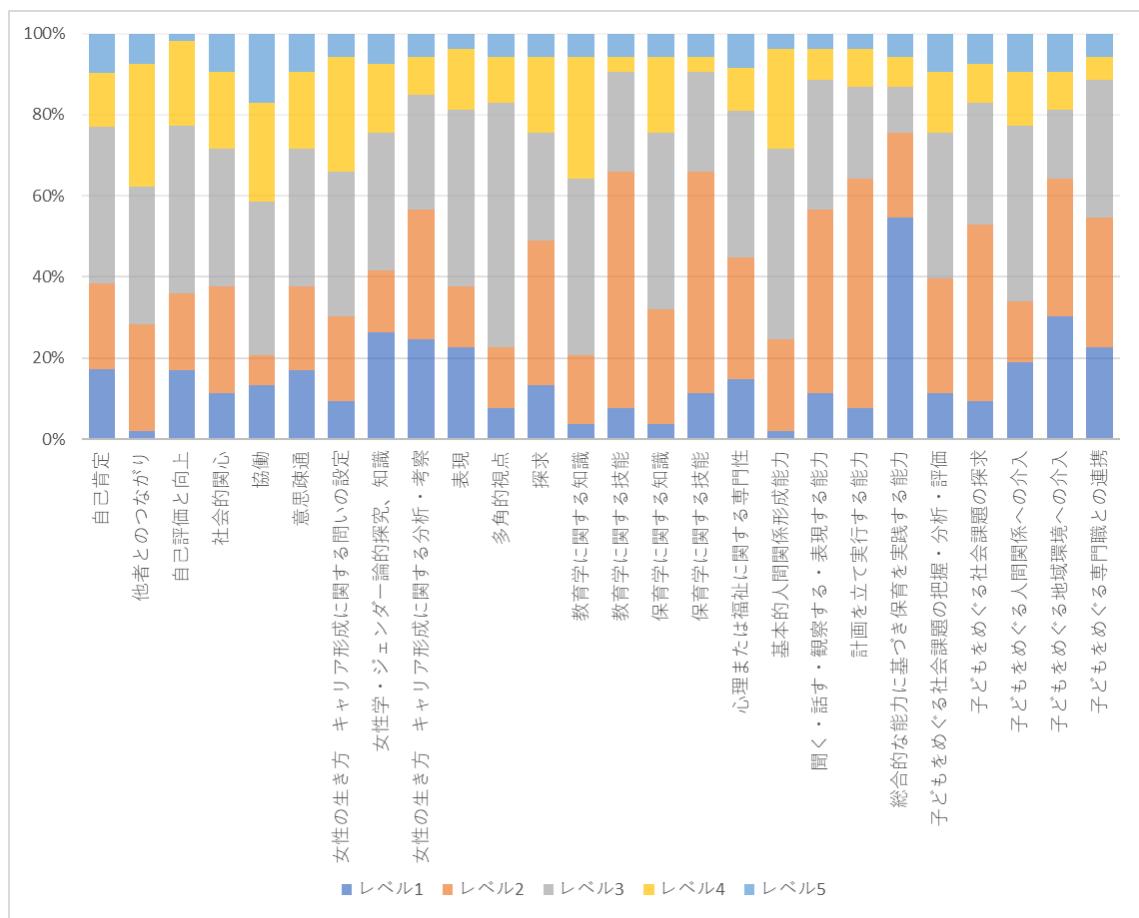


図1 2023年度1年生の結果 (n=53)

2023年度2年生の回答者数は44名、回答率は43.6%であった。2023年度2年生の自己評価を図2に示した。「女性の生き方 キャリア形成に関する問い合わせの設定」を除くすべての項目においてレベル3以上の学生が50%を超えていた。また、図1の1年生と比べるとレベル1およびレベル2と回答した学生の割合が小さくなっていたことから、2年生のほうが自己評価が高かったことが伺える。

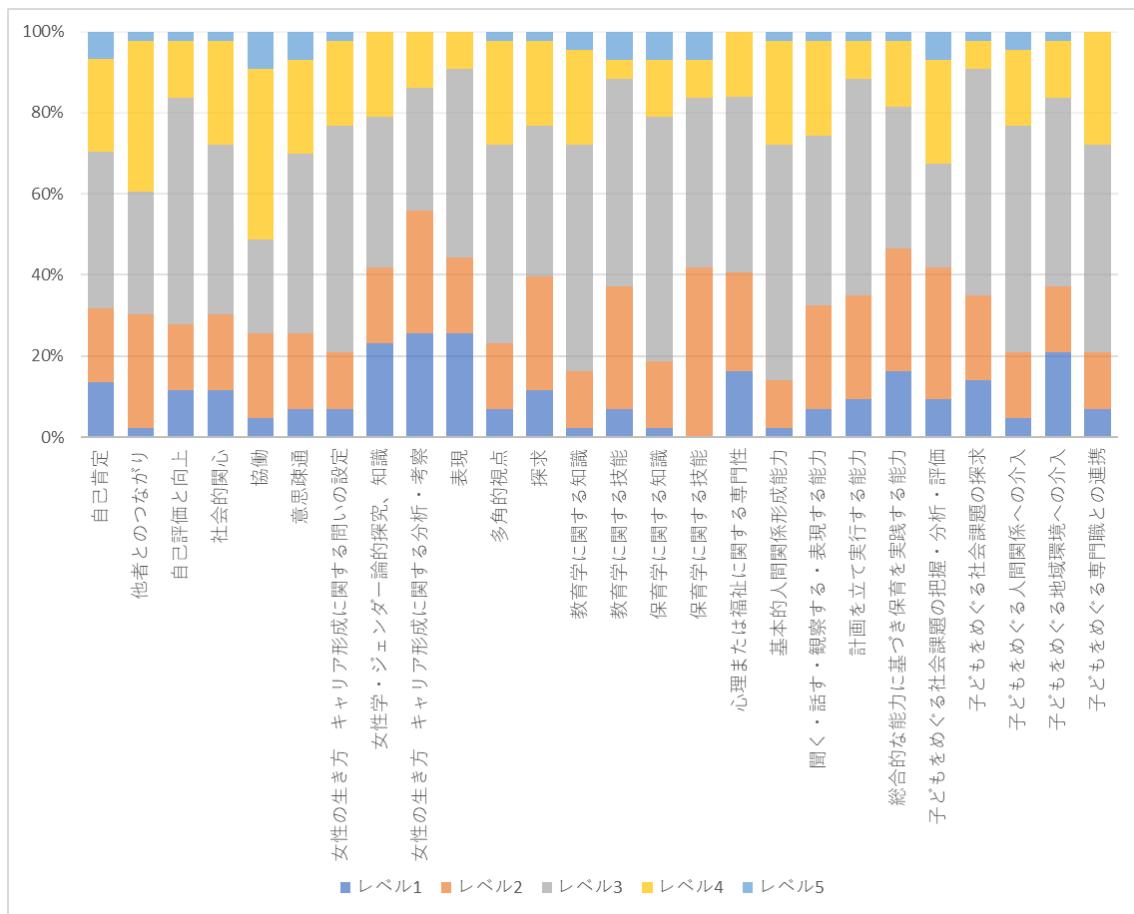
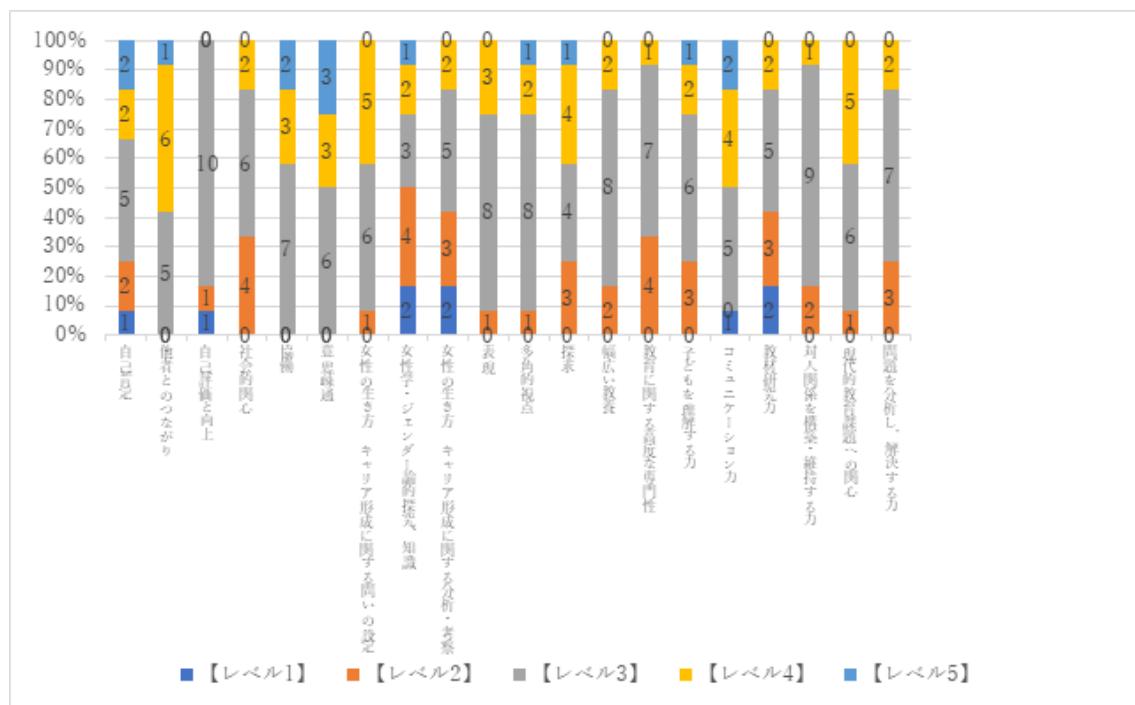


図2 2023年度2年生の結果 (n=44)

教育学科 児童教育専攻

1年生について

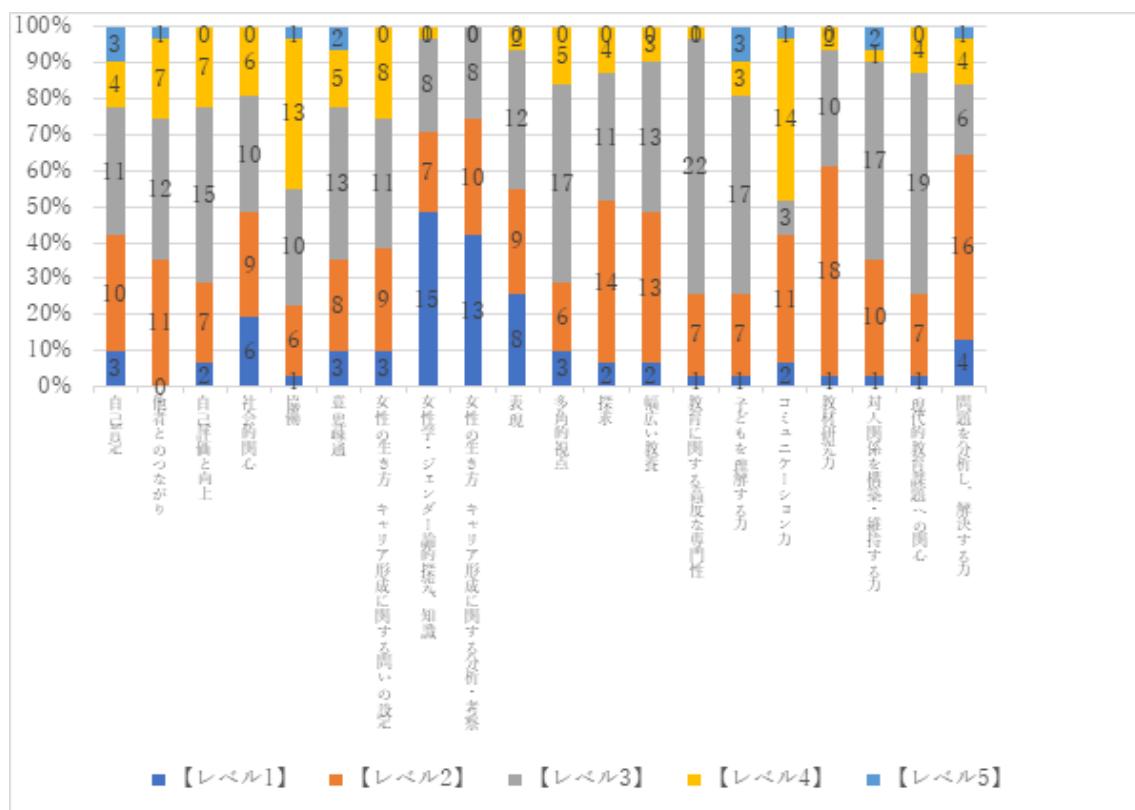
各項目についてみると、「DP5. 教養と専門」「DP6. 実践的指導力」「DP7. 課題解決能力」の全てについては、自己評価がレベル3以上の学生がそれぞれ50%を超えており、全体として自己評価が極めて高いということが分かる。しかし、DP6の「教材研究力」は58%とこれらの中では低い状態にあった。教育法に関する知識はまだ少ないため、このような結果になったと思われる。



2023年度1年生の集計結果(n=12)

2年生について

各項目についてみると、「DP5. 教養と専門」の項目は自己評価がレベル3以上の学生がそれぞれ50%を超えていた。しかし、「DP6. 実践的指導力」の項目「教材研究力」の自己評価レベル3以上の学生は39%、「DP7. 課題解決能力」の項目「問題を分析し、解決する力」の自己評価レベル3以上の学生は35%であった。これら2つの自己評価が低くなった理由としては、2年次から履修する各教科の教育法で教材の扱い方や模擬授業を行うようになり、より深く自身の課題に気づくようになったことが推察される。



2023年度2年生の集計結果(n=31)

教育学科 健康教育專攻

(1) F1・2年生

F1・2年生のDP項目別自己評価ポイントを、それぞれ図1・図2で示した。レベル3以上の学生が40%未満（レベル3未満の学生が60%以上）の項目は、1年生で、DP1（自己受容）の「自己肯定」、DP3（女性のキャリア）の「女性学・ジェンダー論的探究・知識」・「キャリア形成の分析・考察」・「表現」、DP5（専門知識と実践力）の「必要な知識」・「実践する能力」、DP8（社会人として学び続ける姿勢）の「地域社会への貢献」・「自己研鑽する姿勢」・「基盤となる専門知識」となり、これらは1年生で自己評価が低かったことが示唆された。2年生ではDP3「キャリア形成の分析・考察」・「表現」、DP5「必要な知識」・「実践する能力」、DP8「地域社会への貢献」・「自己研鑽する姿勢」・「基盤となる専門知識」であった。2年生でレベル3以上の学生が40%以上となった項目は、DP1「自己肯定」とDP3「女性学・ジェンダー論的探究・知識」であり、2年生で自己評価が低い学生が減少したと考えられた。1年生のDP1「自己肯定」はレベル3以上の学生が35.7%と少なく、レベル1の学生は42.9%だった。一方、2年生のDP1「自己肯定」は、レベル3以上の学生が66.7%、レベル1の学生が8.3%だった。したがってF1年生の「自己肯定」自己評価は低い学生が多く、2年生で減少したことが示唆された。

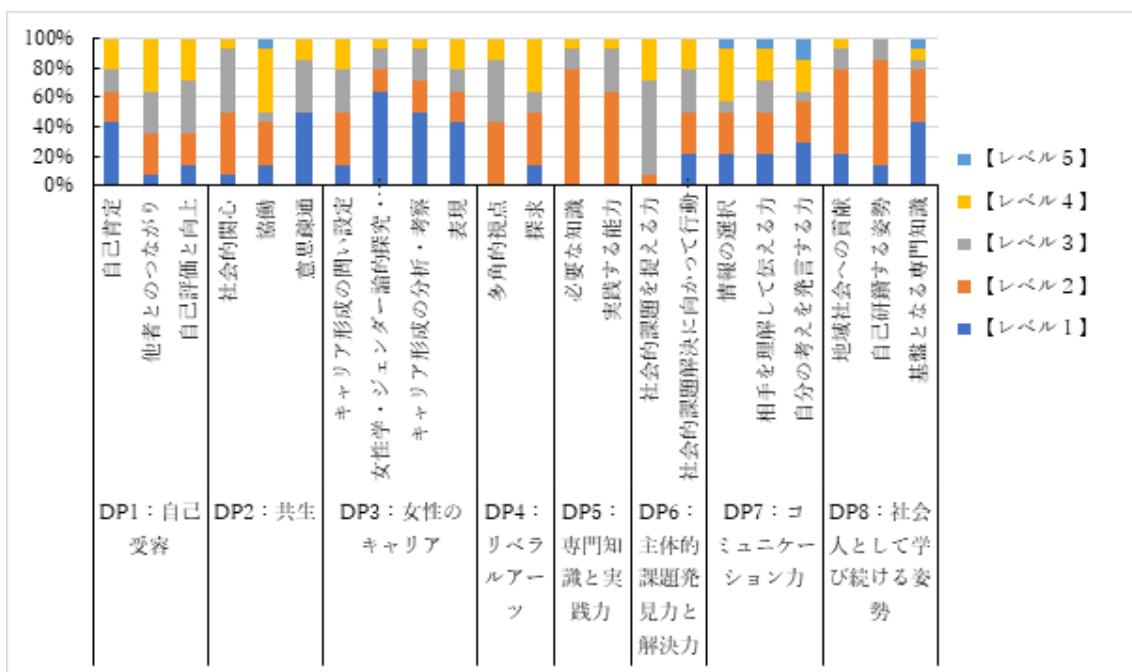


図1. 食品栄養学科 DP項目別ポイント (F1) (n=14)

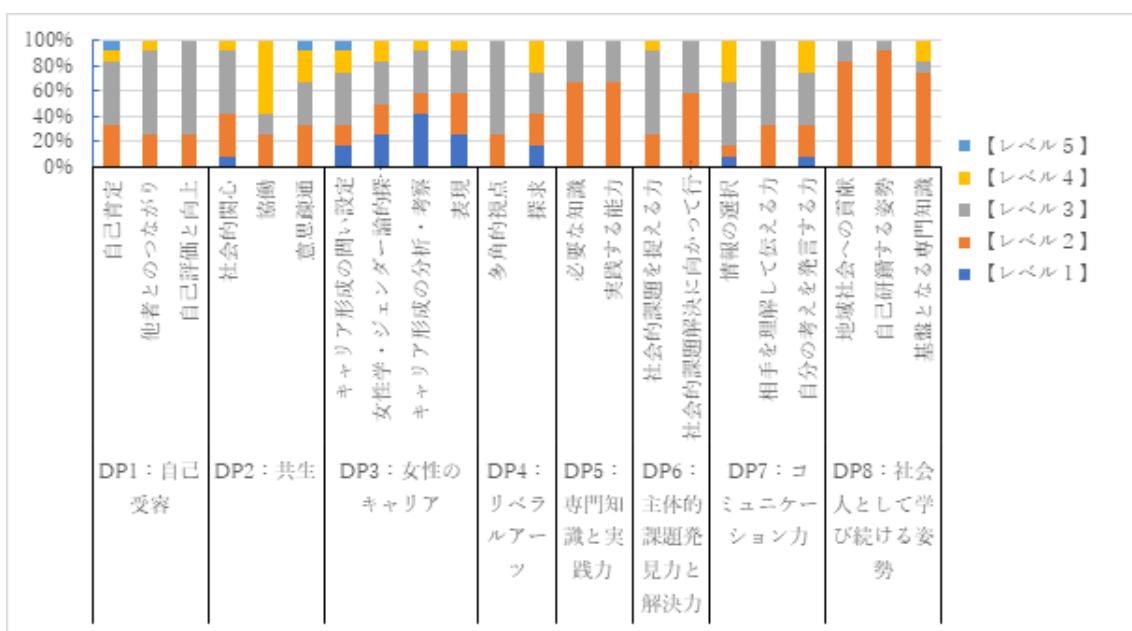


図2. 食品栄養学科 DP項目別ポイント (F2) (n=12)

生活文化デザイン学科

図1および2に、当学科1、2年生のDP項目に対する学生の自己評価を示す。概ね学年が上がると自己評価のレベルも上昇する傾向に見受けられるが、DPごとに着目すると、以下のことが考察できる。

- ・DP1：自己受容について、どちらの学年も6割の学生がレベル3以上と評価しているが、学年に関わらず2極化している、とも言える。
- ・DP2：共生について、異なる背景を持つ人と協働できると評価する学生は7割前後であるのに対し、社会的関心が低いので、社会へ羽ばたく準備としての学修が必要である(例：新聞記事の参照など)。
- ・DP3：女性のキャリアについて、レベル1と評価する学生が2～4割見受けられるので、キャリア科目を学修することが、自分の職業選択などキャリア形成に際し、必ずしも実効性を伴っていないと考えられる。
- ・DP4：リベラルアーツについて、多角的視点に関する設問に対してレベル3以上と評価する学生が6～7割に達しており、教養科目としての学修効果は得られていると言えよう。
- ・DP5：専門知識習得について、1年生より2年生はレベル5と評価する学生が増えるが、当学科のカリキュラムにおいては、2年前期終了時にコース分けとなり、専門科目の学修も2年後期以降に集中するため、低レベル評価となって当然と言える。
- ・DP6：問題発見・解決力についても、DP5に準ずる問い合わせであるため、同様の傾向。
- ・DP7：情報収集・分析力について、いずれの学年も半数越えの学生が低レベル評価であるが、2年生になるとレベル5評価をする学生が現れることから、高レベル評価に値する他の学生と比較して自己評価している可能性がある。
- ・DP8：専門的提案力は、DP5およびDP6に準ずるものと考えられる。

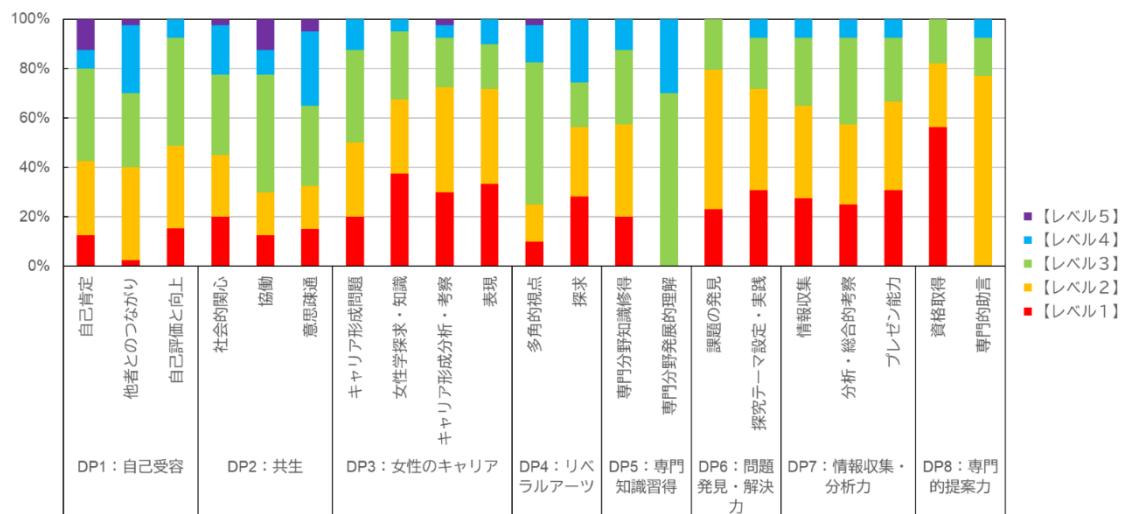


図1 アンケート集計結果<1年 N=40>

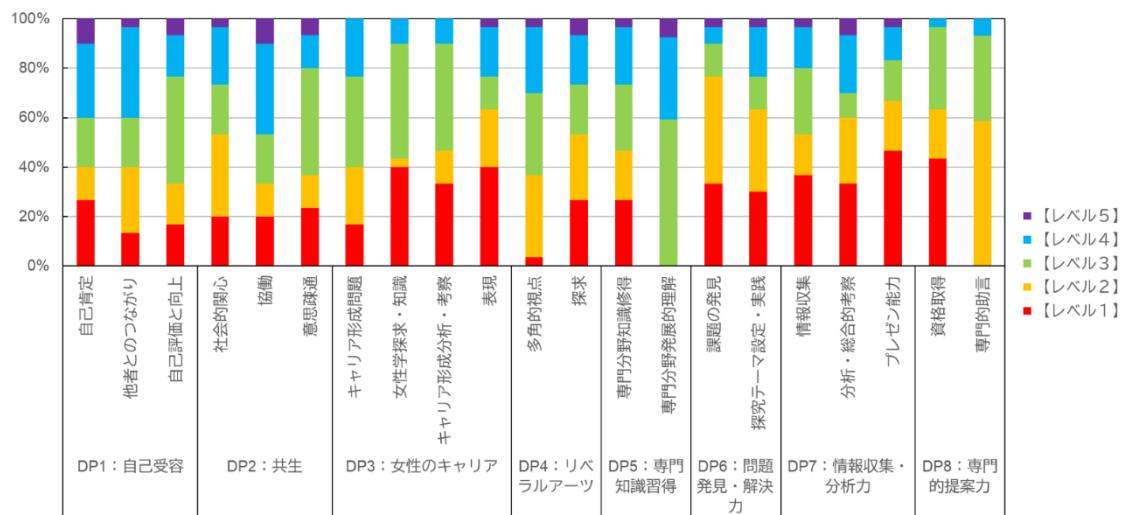


図2 アンケート集計結果<2年 N=30>

日本文学科

2023 年度に行った一般教育 DP 項目に対する学生の自己評価の状況は図 1 (1 年生)、図 2 (2 年生) の通りである。

1 年生の回答では、多くの項目でレベル 1・レベル 2 を合計した回答が半数近くまたは半数以上を占めており、最低限のレベルに達していると判断した学生が多いことが窺える。DP4 「多角的視点」はレベル 3 の回答が多く、比較的自己評価が高い水準にある。1 年生と比較すると 2 年生はレベル 3 以上の回答が多くなる傾向にあり、2 年間の一般教育科目の履修を通して一定程度の成果が挙がっていると思われる。

自己評価が低い傾向にあるのは DP3 (女性のキャリア) 関連の「女性学・ジェンダー論的探究、知識」「女性の生き方・キャリア形成に関する分析・考察」「表現」3 項目で、1 年生・2 年生ともにレベル 1・レベル 2 の回答率が比較的高くなっている。

1.1 一般教育 DP (DP1~4)

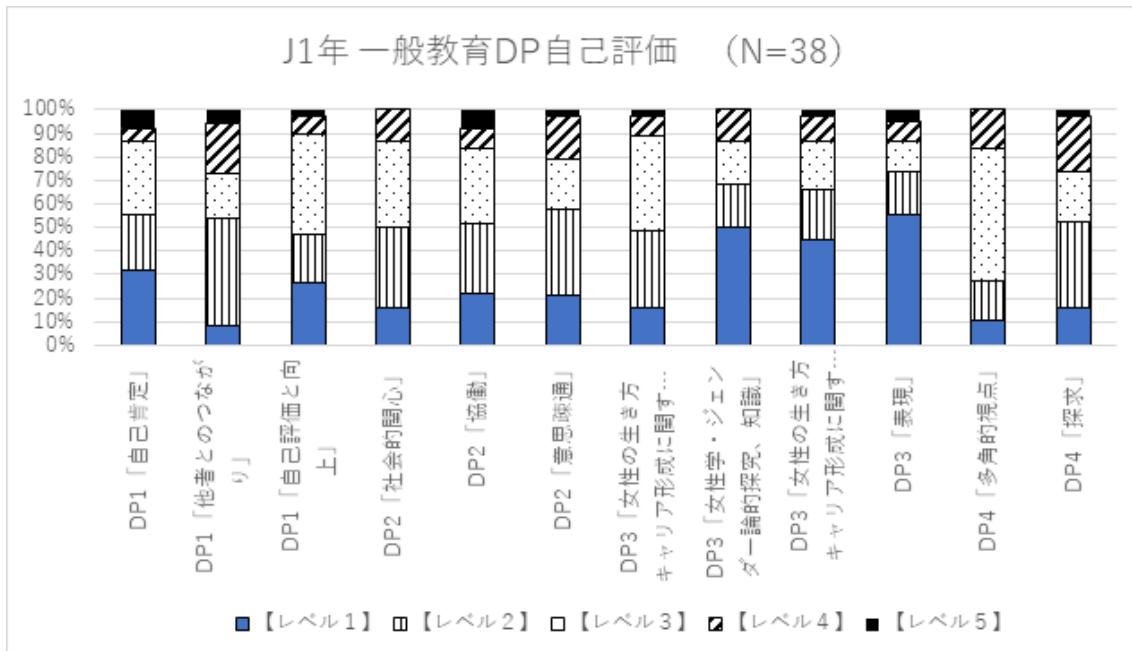


図 1 一般教育 DP (1 年生)

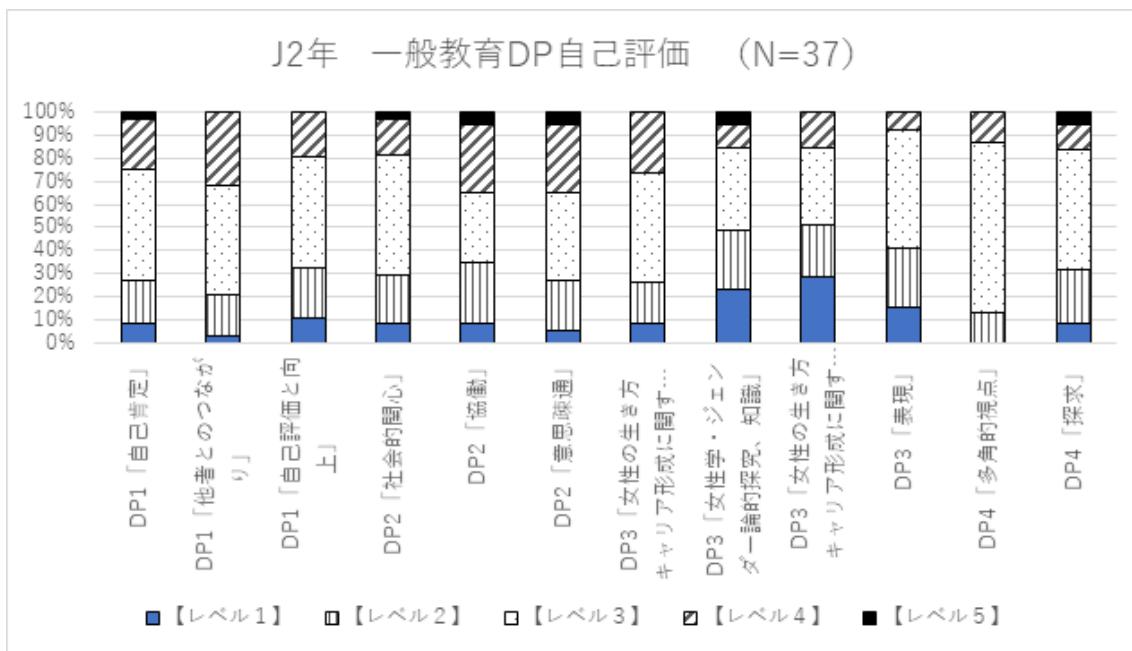


図2 一般教育DP(2年生)

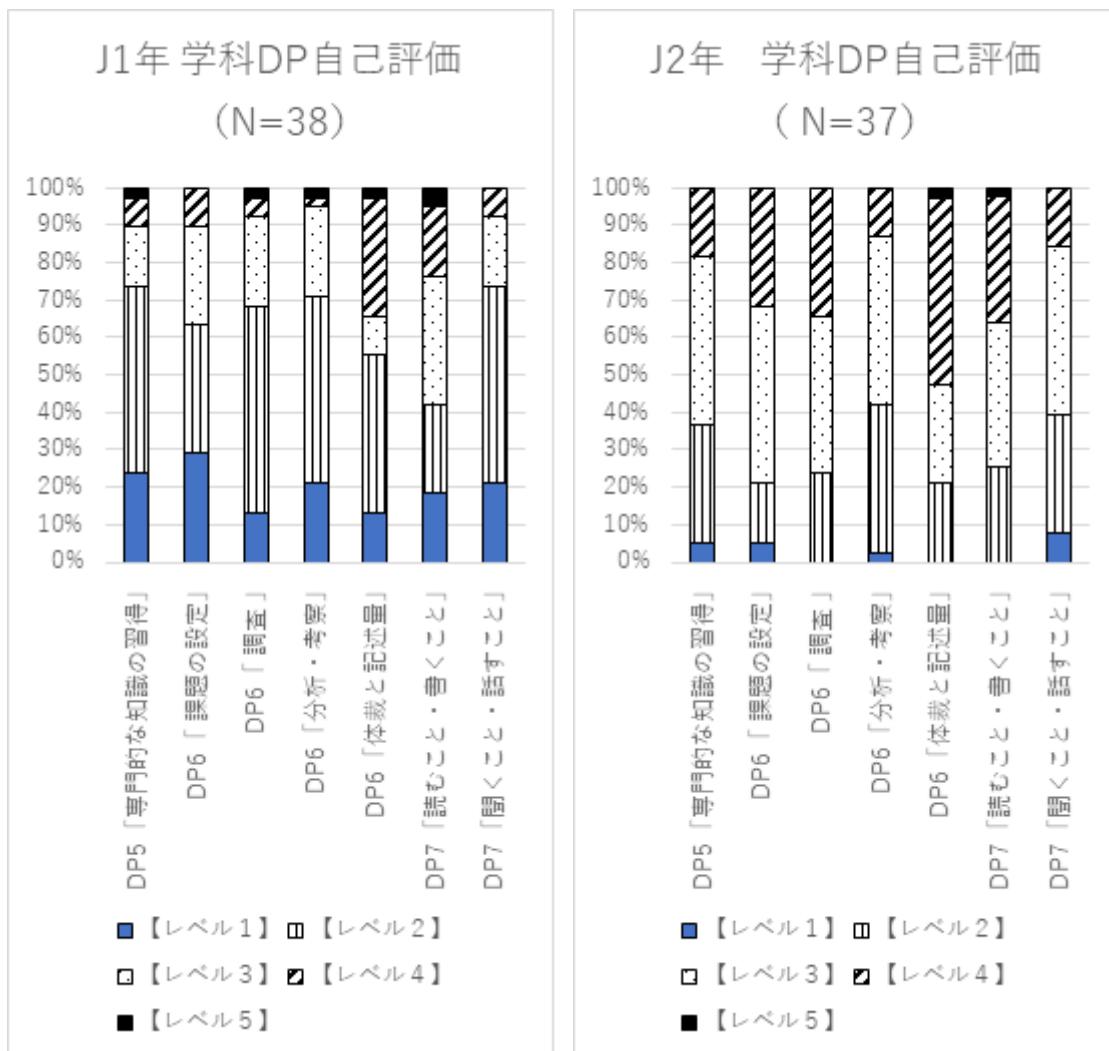
1.2 学科固有DP(DP5~7)

一方、日本文学科の固有DP項目に対する学生の自己評価の状況は、図3(1年生)・図4(2年生)の通りであった。

1年生の回答では、多くの項目でレベル1・レベル2の合計の回答が過半を占めており、1年生の段階での学科が求める最低限のレベルに達している(と自己評価している)学生が多いと言えそうである。DP6「体裁と記述量」とDP7「読むこと・書くこと」はレベル3以上の回答の割合が他の項目と比べても高くなっている。文章作成に関しては、1年次修了時点でも比較的自己評価が高く、自信を持っている学生も多いのではないかと推察される。また、この時点でもレベル5と回答した学生が数名おり、自己評価が極めて高いということになるが、アンケート項目に示した到達度の内容を十分理解していない可能性もあり、今後の経年調査に注目すべきである。2年生の回答では、レベル5の回答は却って少なくなっている。

一方、レベル1の割合に着目すると、レベル1の回答者の割合が最も高いのはDP6「課題の設定」、次いでDP5「専門的な知識の習得」である。レベル2に達していない、則ち1年次の専門科目の知識を十分に理解しきれていないと考えている学生も少なからず存在すると言え、留意する必要がある。

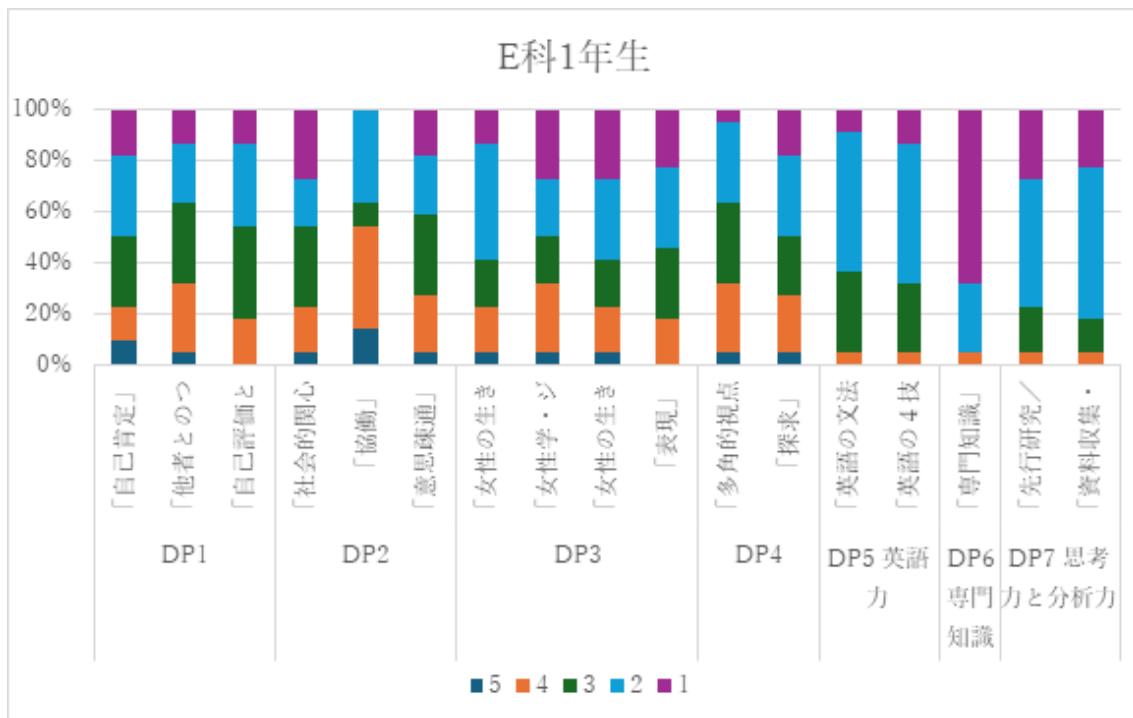
2年生の回答では、一般教育DPと同じくレベル3・レベル4の割合が高くなっている、特にDP6の「課題の設定」「調査」に関しては、レベル3・レベル4の回答の合計が7割以上に上った。1年次に比べると2年次には演習科目が大幅に増えることもあり、課題の設定方法や調査方法をある程度修得できた学生が多いと見られる。ただし、DP6「分析・考察」、DP7「聞くこと・話すこと」についてはレベル3以上の回答が比較的低い傾向があり、2年次修了時点でこれらの項目について未だ苦手意識を持っている学生が多い可能性もある。



英文学科

1・2年生に関しては5段階の選択肢それぞれに具体的な達成度が示されている。従つて低い数値（1および2）を選択したとしても、それは（「控えめ」とはいえるかもしれないが）必ずしも否定的な自己評価としては解釈できない可能性があることに留意すべきである。

1年生



DP1 自己受容（自己肯定、他者とのつながり、自己評価と向上）では、比較的高い自己評価（4および5）を持っている学生もいるものの、1~2の低い自己評価を持つ学生も一定数存在する。特に「自己評価と向上」について4以上の自己評価（4「他者の声を公正に評価し、自分の人生目標のために具体的に努力して行くことができる」5「他者の自己評価・自己実現を助けることができる」）を持つ学生は2割以下に留まった。

DP2 共生（社会的関心、協働、意思疎通）では「共同」に関しては半数以上が高い自己評価（4および5）を示した。ただし相対的にみて「社会的関心」や「意思疎通」について自己評価が低くなっていることからは、他者との関わりにおいてやや受け身的な態度が支配的となっていることが想像される。

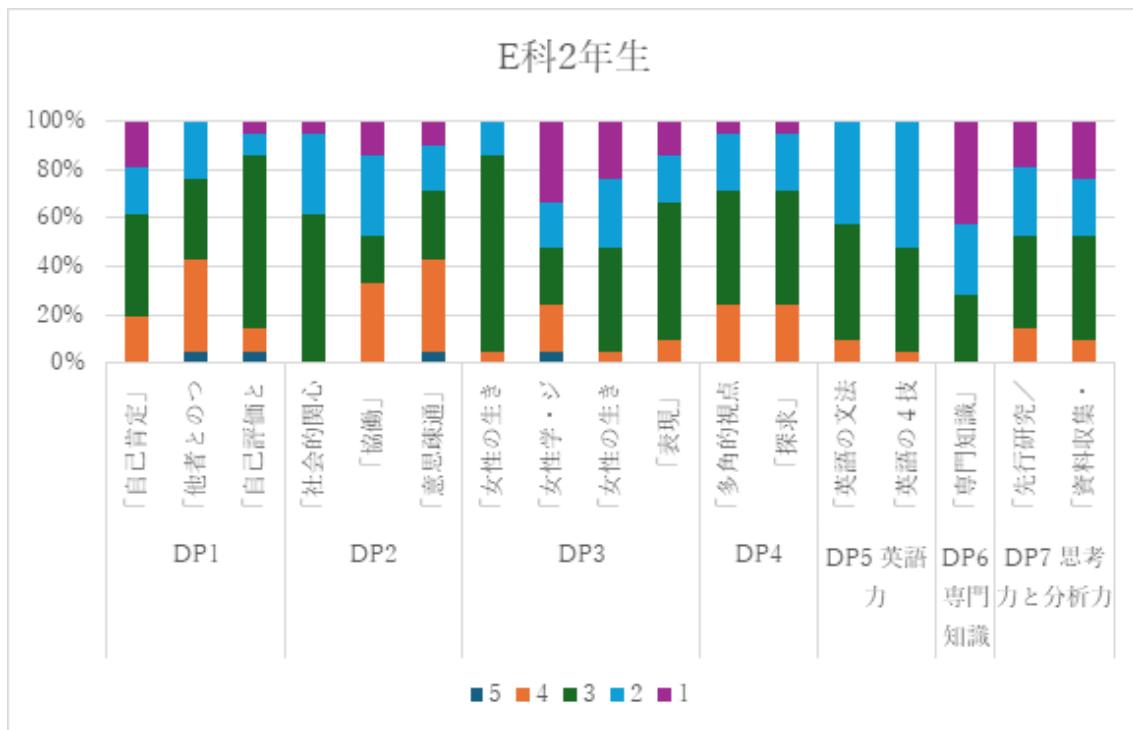
DP3 と DP4 女性のキャリアおよびリベラルアーツでは「女性学・ジェンダー論的探究、知識」「女性の生き方・キャリア形成に関する分析・考察」「表現」3項目で、1と回答する

学生の割合がやや高くなっていた。ただし、後述の通り、特に「表現」の項目は2年生において向上する傾向がみられる。

DP5 英語力（英語力、文法・4 技能）に関しては、高い自己評価を示す学生は少ないもの、最低の自己評価（1 「高校レベルの文法・語彙知識／表現力を身につけている」）を示す学生は少なく、2 「基本的な英語の文法・語彙知識を身につけている／自分の経験したこと」を英語で表現することができる」と回答する学生が多かった。

DP6 と DP7 専門知識および思考力と分析力に関しては、低い自己評価を示す学生は多かったが、これは1年次では英語力の涵養に力点をおく学科カリキュラムの構造上、当然予想される結果である。したがって、このことが課題としてみなされるべきかは議論を要する。

2年生



DP1 自己受容（自己肯定、他者とのつながり、自己評価と向上）では、1年生と比べて低い自己評価（1 および 2）を示す学生は少なく、自己肯定感や他者との関係性に関して、自信の向上がみられる。「自己評価と向上」についてごく少数ながら 5 「他者の自己評価・自己実現を助けることができる」と回答している学生がいることはむしろ特筆に値することであろう。

DP2 共生（社会的関心、協働、意思疎通）における自己評価は、1年生のときと大きな変化は見られず、この分野においては 2 年生になっても大きな自信を持っていない学生が多い

ことが読み取れる。特に「社会的関心」については3（社会の諸問題のなかに当事者意識を持つものがある）と答えた学生が増えており、これはDP3の「表現」における自己評価の向上とも関連しているかもしれない。

DP3 女性のキャリアでは「表現」の項目では高い自己評価（4および5）を示す学生こそ少ないものの、3（自分の将来像とキャリア形成の課題を説明できる）と回答する学生が増え、低い自己評価（1および2）は減少しており、着実な成長が読み取れる。

DP4 リベラルアーツでは高い自己評価（4および5）を持っている学生は少ないものの、低い自己評価（1および2）は少なくなっており、こちらも着実な成長が読み取れる。

DP5 英語力では4や5を選択する学生はきわめて少ないので、もっとも低い自己評価を回答する学生はほぼいなくなっており、1年生に比べると、英語力に対する自信が向上し、客観的に自分のレベルを把握するようになってきていることがうかがえる。

DP6とDP7 専門知識および思考力と分析力に関しては、2年生になるとやや専門的な内容の授業が増えることもあるが、1年生に比べると若干の向上がみられる。

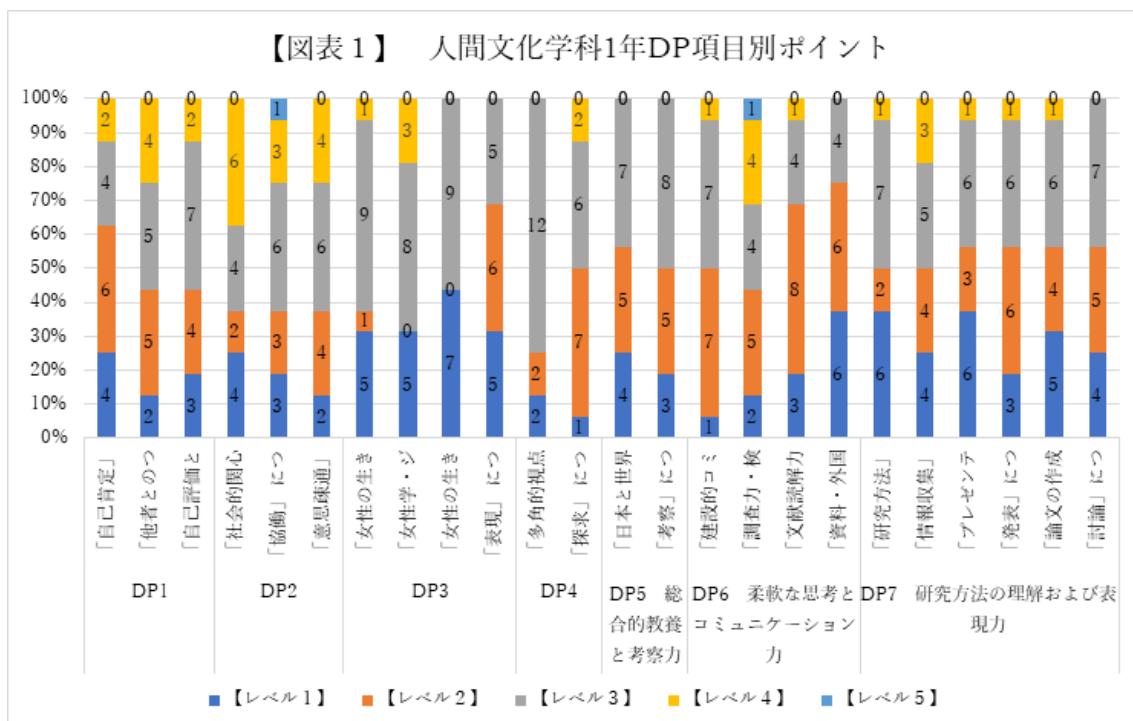
人間文化学科

<1年>

人間文化学科1年生のDP項目に対する自己評価は図表1の通りである。今回の回答数は16、回答率は47%であり、学科全体の状況を正確に表しているとは言えない。

各項目について、まず一般教育科目をみてみると、DP1ではレベル2、DP3ではレベル1・3、DP4ではレベル2・3の割合が高くなっている、各項目に対する関心や問題意識の高さは確認できるものの、自己評価は低いことが明らかである。

学科固有のDP項目に関しては、DP6「柔軟な思考とコミュニケーション力」の「調査力・検索力」で自己評価レベル3以上の学生が50%を超えており、自己評価が高いことがわかる。一方で、それ以外の項目ではレベル1・2の学生が50%以上を占めており、自己評価が低いことが確認できる。

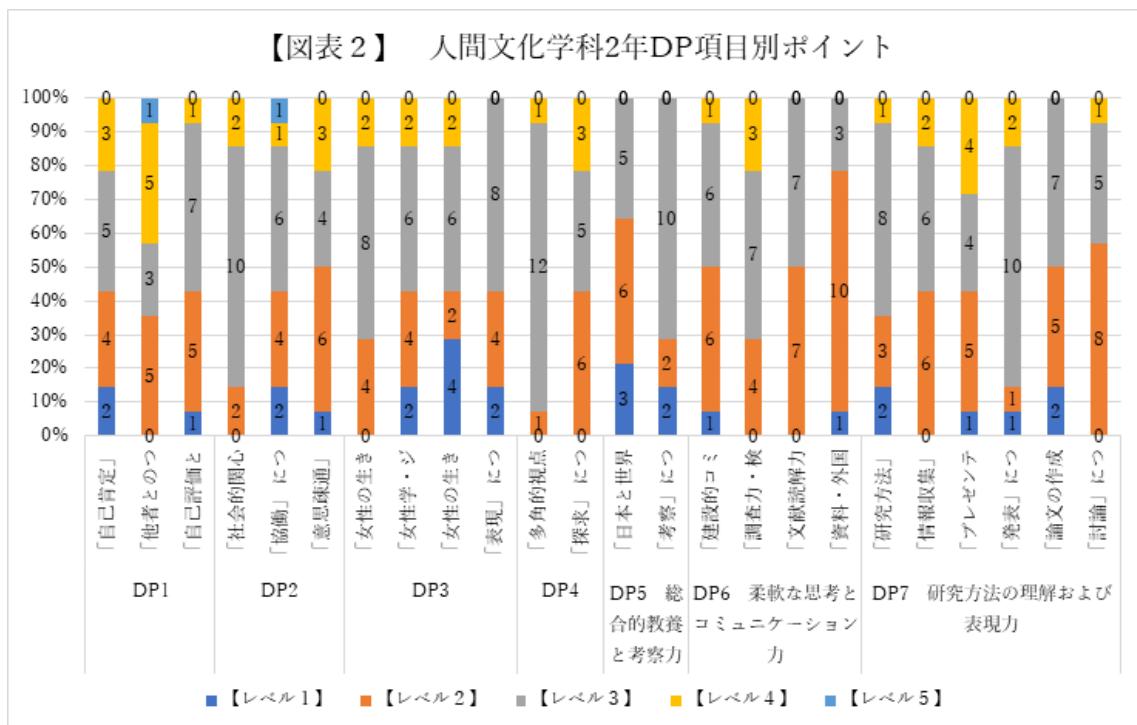


<2年>

人間文化学科2年生のDP項目に対する自己評価は図表2の通りである。今回の回答数は14、回答率は28%であり、学科全体の状況を表す結果とは言い難い。

各項目について、まず一般教育科目をみてみると、DP1の「他者とのつながり」でレベル4・5の学生が40%を超えるほかは、いずれの項目もレベル4・5の学生は25%を下回っており、とくにレベル3の学生が多くなっている点が特徴である。

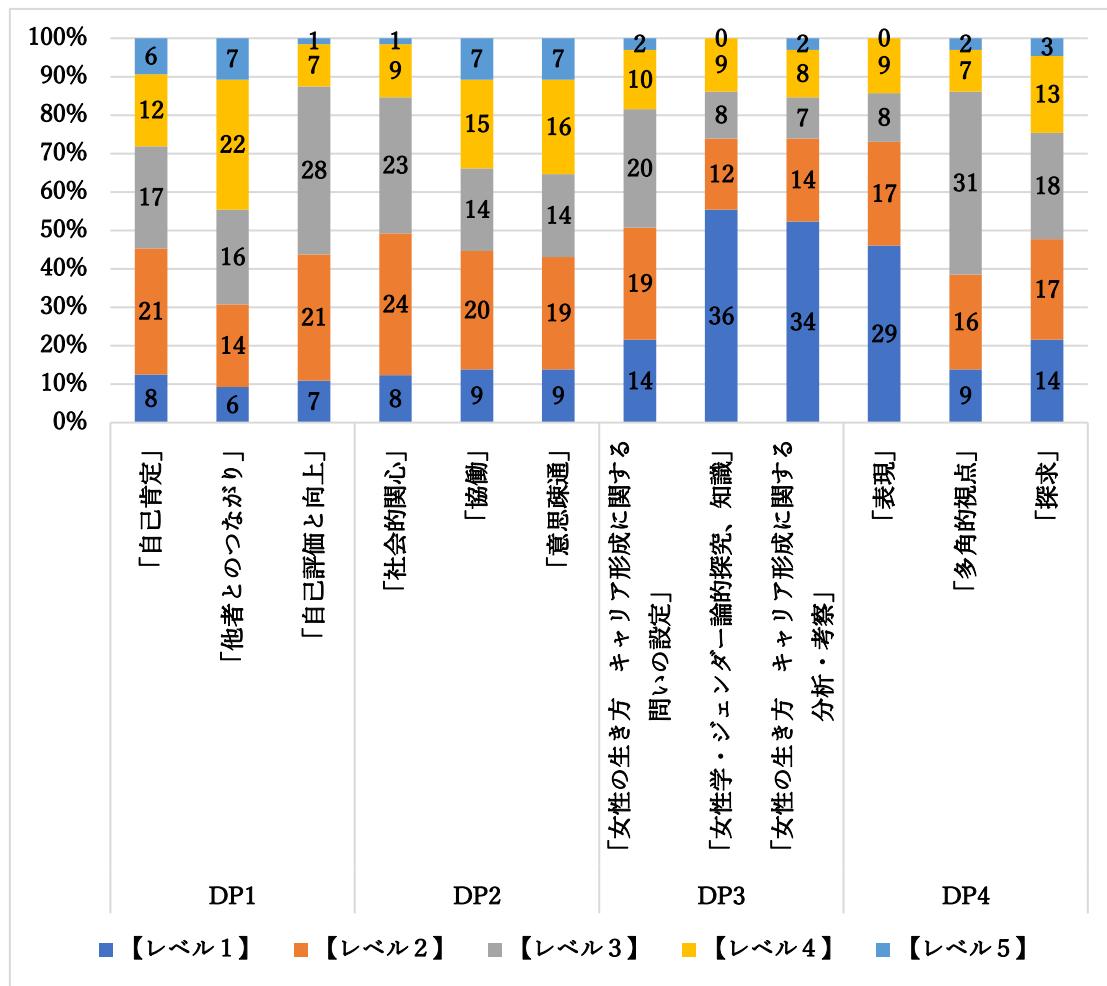
学科固有のDP項目に関しては、DP5「総合的教養と考察力」の2項目、DP6「柔軟な思考とコミュニケーション力」の「文献読解力」「資料・外国語文献読解力」、DP7の「論文の作成」でレベル4・5の学生が0%となっているなど、自己評価が総じて低いことがわかる。



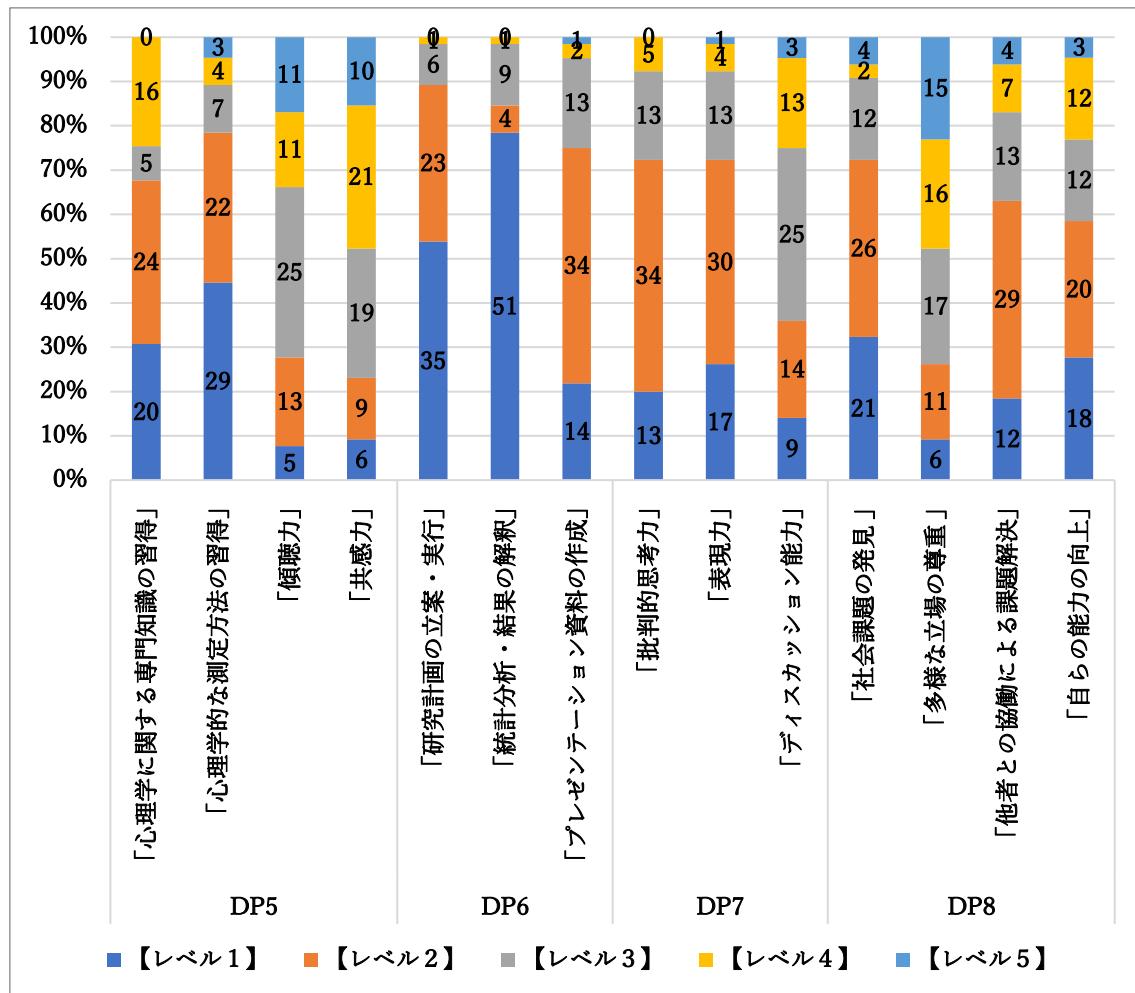
心理行動科学科

<1年>

一般教育についての DP の学修到達度についての評価は、レベル 2 まで到達していると評価する学生は 4 割ほどおり、レベル 3 まで達していると評価する学生は 6 から 8 割いることが示された。特に DP についての評価が他の DP についての評価よりも高かった。

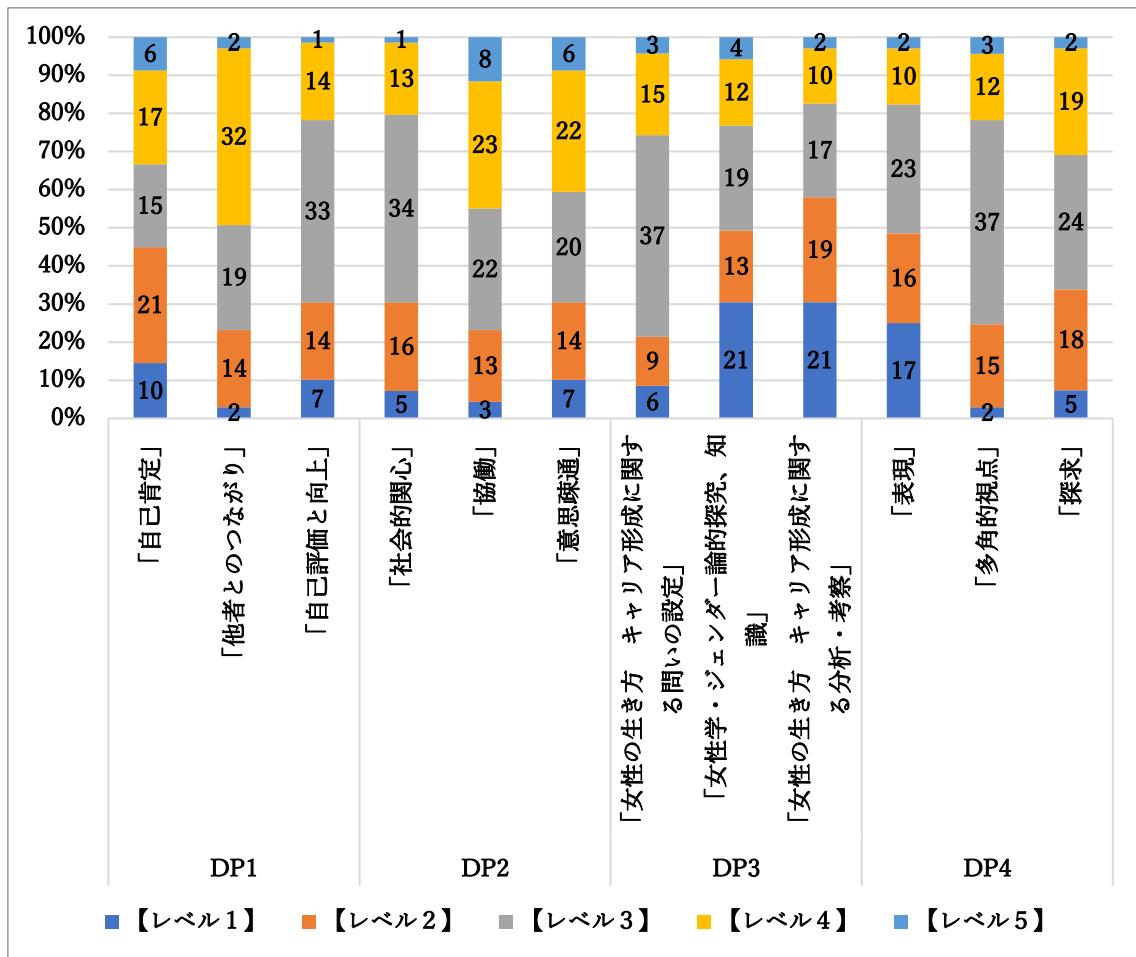


専門教育科目の DP についての学修成果の到達度については、DP の「傾聴力」や「共感力」については、レベル 4 に達していると評価する学生が 8 割程度いることが示された。一方で、他の DP については、概ね低くレベル 2 と評価する学生が 7, 8 割いることが示された。



〈2年〉

一般教育についての DP の学修到達度についての評価は、レベル 3 と評価する学生が半数以上おり、満遍なく高い傾向が示された。



専門教育科目についての DP は、レベル 3 まで達していると回答する学生が 7 から 9 割ほどいることが示された。DP の「傾聴力」や「共感力」については、レベル 4 に達していると評価する学生が 7、8 割程度いることが示された。

